エヴアンヂェリーンに就いて

下條信敏

一

アケーディア（Acadia）の哀詩エヴアンヂェリーン（Evangeline）は、アメリカの最大詩人ロングフェロウ（Henry Wadsworth Longfellow 1807～82）の幽艶可憐な長篇叙事詩で、彼の名声を高からしめた稀有の傑作で、北米に於ける英国殖民の初期にアケーディアに起つた歴史的事件に関するロマンティックな一挿話である。

アケーディアとは、今の加奈陀の一州大西洋の波に洗はれるNova Scotiaのことで、初めこゝに殖民したのはフランス人であつたが、英仏両殖民地間に勢力争が屢々あつて、遂に一七三一年に至り、仏国政府は、該地域を英国に譲与した。

けれども、フランスの住民中には、英国政府に従順ならぬ者もあつて、これらが、英国の束縛を快しとせぬ土人を煽動して、屢々騒擾を醸し、英国人を苦しめたことが少なくなかつたのである。そこで、この問題をいつまでも抛棄して置くことは将来に禍根を残すものであると考へた英国のJ George二世は、翌年、突如、一日の中に土地家屋家畜を没収して、純朴な農民をアケーディアから追放し、米国南部の他の英国の殖民地に分散することを厳命した。この際英国軍に蹂躙せられたアケーディアの村に起つた悲劇を題材にしたのが、この叙事詩である。即ち、この不時の兇変にアケーディアのフランス人たちは、住み馴れた郷土を後に妻子兄弟相離散して終生相逢ふの期を失つた者が少なくなかつた。作者は、この惨事につれて起つたと伝へられる実話に、詩的感興を触発せられ之に基づいてこの名篇をなしたのである。作者は予てからNew Englandの歴史に深い感興を覚え詩材を漁つてゐたが、偶ま或日のことホーソン（Nathaniel Hawthorne 1804～64）と共に南ボストン（Boston）の教区長コノリィ（H.L. Conolly）を招待して晩餐を共にしたことがあつた。食卓を囲んでの快談の折、コノリィは、一檀徒から聞いた話として、アケーディアに住んでゐたフランスの移民が、英国政府のために追放せられた結果、二人の恋人が永久に訣れねばならなくなつた哀話を

小説に書くやうにホーソンに勧めたが、ホーソンは、大して気乗りがしない様子であつた。然しロングフェロウは、この話に多大の詩的感興を覚え「若し君がこの材料を小説にしたくないなら、僕に叙事詩を書かして呉れ給へ」と言ふとホーソンは即座に承諾した。そこでロングフェロウは、苦心惨憺の後この一篇を上梓するに至つたと言ふことである。

二

この物語詩の主人公エヴアンヂエリーンは、村の豪農ベネディクト（Benedict）なる七十の老翁の一人娘で、容貌麗はしく気立優しき淑女で、十七歳の時幼馴染の鍛冶屋の息子ゲーブリエル（Gabriel）と恋仲となり、互に偕老同穴の未来を楽んでゐた。ところが、二人の結婚式の夕べ、図らずも英国軍が全村追放の命令を下したので、その騒擾の中に、この二人はほいない袂を別ち、こゝに彼女の流浪の生涯が始まるのである。彼女は、切ない愛着の絶つよしもなく、一意已が恋人の跡を追ひ西へ東へとあてもない捜索の旅を続け幾山河を越えての憂き艱難に一日も寧んずる暇とてもないのであつた。漸く目的の地にたどり着いて見ると、生憎尋ねるその人は、丁度其処を立ち去つたあとであつたり、船中の両人がすれ違ひになりながらも、それと気付かずにやりすごしたりして、いつも間一髪といふ際どい瀬戸際で行き違ひとなつて、あたら辛苦艱難も遂に報いられる機を恵まれずに終つた。かくて空しき捜索の中に数十年の星霜は過ぎて、いつしか彼女は頭に霜を戴く身となつたので、今はこれまでと諦めて、遂にフィラデルフィア（Philadelphia）に落ちつき、婦人慈善会員として働いてゐた。偶ま疫病が流行したので、彼女は苦しめる多くの患者を真心こめて介抱してゐる中、その病院の一室で今臨終の息を引取らうとする一人の老人が目に止つた。それは図らずも永年已が尋ねた愛人ゲーブリエルその人であつた。互にそれと気付いたのも束の間、彼はエヴアンヂエリーンの名を呼ばうとしたが、唇を動かす間にはや息は絶えたのである。死骸となつた恋人の頭をだきかゝへたまゝ、彼女は、この臨終の一刹那に、再び二人を結びつけて呉れた神に感謝しつゝ、彼女自身も、また同時に亡き人となつた。さうして彼が葬られた墓の側に列んで彼女も葬られた。

と言ふのがその筋で、世にも痛ましい恋の哀史である。

This is the forest primeval. The murmuring pines
and the hemlocks,
Bearded with moss, and in garments green, indistinct
in the twilight,
Stand like Druids of eld, with voices sad and prophetic,
Stand like harpers hoar, with beards that rest on their
bosoms.
Loud from its rocky caverns the deep-voiced neighbour-
ing ocean
Speaks, and in accents disconsolate answers the wail
of the forest.

こゝは千古の原始林。
苔蒸し蔦纏はる松柏は、
風に囁やき、小暗き中に朦朧と、
立つや古くの僧徒の如く、悲しげに予言を語る声をあげ、
立つや胸先に垂るゝ白髯の弾琴師の如く。
程近き大海の濤声は洞の巖に高鳴りて、
森の悲しき調べに淋しげに応ふ。

This is the forest primeval; but where are the hearts that beneath it
Leaped like the roe, when he hears in the woodland the voice of the huntsman?
Where is the thatch-roofed village, the home of Acadian farmers,—
Men whose lives glided on like rivers that water the woodlands,
Darkened by shadows of earth, but reflecting an image of heaven?
Waste are those pleasant farms, and the farmers for ever departed!
Scattered like dust and leaves, when the mighty blasts of October
Seize them, and whirl them aloft, and sprinkle them far o'er the ocean.

Nought but tradition remains of the beautiful village of Grand-Dré.

こゝは千古の原始林。
さあれ森の中に猟人の声聞く小鹿の如く、
その樹の下陰に胸躍らせし人々は今那辺ぞ。
アケーディアの農家の郷——、
今は地上の蔭に掩はれながら唯空の姿のみを映して、
森を流るゝ流れの如く、清く安らけく世を渡りし村人、
草葺の賤が伏屋の一と村は今那辺ぞ。
かの楽しき畠も荒れ果てゝ、耕す人も永久に往いて跡なし。
野分の風の強らして、塵の如く木の葉の如く散り〳〵に、
高く舞ひ揚げられ遠く海の彼方く吹き散らされて、
残るは唯美はしきグラン・プレー村の口碑のみ。

Ye who believe in affection that hopes, and endures, and is patient,
Ye who believe in the beauty and strength of woman's devotion,
List to the mournful tradition still sung by the pines of the forest;
List to a Tale of Love in Acadie, home of the happy.

愛は望みて堪へ忍ぶべきものと信ずる人々、
処女の貞節の美はしく力強きを信ずる人々、
聴けよ、森の松柏の今も尚奏づる古への悲しき伝説を、
聴けよ、幸多かりし楽土アケーディアの恋物語を。

以上の三節は、序歌（Prelude）で、荘重にして典雅の響きを朗々と伝へてゐる。作者は、この地方を訪れたことがないとの事であるから、書物で読んだか自己の想像で推測するかしてこんな風に描写したのであらう。

さてこの詩の本文は、第一部と第二部とから成つてゐる。

第一部は、先づ、遠く都を離れた片田舎の豊饒な、谷間に隠れた自然郷なる一小村グラン・プレの、桃源郷的情景である。住民は土地を耕し林檎を作り羊を飼つてゐる純朴な農民で、神を敬ひ人を愛して、互に平和を楽しんでゐる。富める者と貧しき者との区別もなく、総ての人が豊かであるから戸には錠を下さず窓には横木もなく、人の心の打ち開かれてゐるやうに夜でも戸は開かれたまゝである。かゝる純良な農夫等が今、歓喜に充ちた懐かしの故郷を追はれて異郷に移住を強ひらるゝことの痛ましさを作者は強調してゐる。

Fair was she to behold, that maiden of seventeen summers.
Black were her eyes as the berry that grows on the thorn by the way-side,
Black, yet how softly they gleamed beneath the brown shade of her tresses!
Sweet was her breath as the breath of kine that feed in the meadows.

十七の花の盛りのエヴアンヂェリーンは、見るからに美しい乙女であつた。
彼女の眼は路傍の茨にみのる漿果のやうに黒く、
彼女の眼は巻髪の褐色の蔭に優しく輝いてゐた。
彼女の呼吸は野に遊ぶ牝牛の呼吸のやうに甘く柔かくかよつてゐた。

Many a suitor came to her door, by the darkness befriended,
And, as he knocked and waited to hear the sound of her footsteps,
But, among all who came, young Gabriel only was welcome;
Gabriel Lajeunesse, the son of Basil the blacksmith,
Who was a mighty man in the village, and honoured of all men;

黄昏ともなれば、村の若者らは、
愛を求めて彼女を訪れ、扉を叩いては、

出て来る彼女の足音を待ち焦れてゐたが、
こと問ふ若者のうち、歓待を受ける者は、
唯ゲーブリエルのみであつた。
鍛冶屋バジルの一人息子のゲーブリエル・ラアヂュネスは、
村でも力強い若者で、人々からは敬はれてゐた。

と歌はるゝ婚約早々の美はしき乙女エヴアンヂェリーンと、雄々しき若人ゲーブリエルなる二人の恋人も無論この騒擾の渦中に捲き込まれざるを得なかつた。浜辺は人々の乗船と積荷の為の混乱にまぎれて相愛の二人も、つひ別れ別れとなり、エヴアンヂェリーンは、先きに船出するゲーブリエルを海岸に見送つて彼の手を握り、己が頭を彼の肩に寄せつゝ

"Gabriel! be of good cheer! for if we love one
another,
Nothing, in truth, can harm us, whatever mischances
may happen!"

ゲーブリエルさん！　しつかりして下さい！
私達が互に、ほんとに愛し合つてゐるならば、
たとへ、どんな不幸が起らうとも、
決して私達を害ふことはありません！

と微笑みながら彼女は囁いた。ところがその夜英国の軍隊のために、全村一挙にして火の海と化したのを見た彼女の老父は、悲みと恐れで失神して倒れ、遂に敢へない最後をとげたのであつた。そこで匆々に埋葬を済ませた上、村の牧師フィリシアン（Felician）を保護者として彼女は後から旅路へと出で立つたのである。

三

第二部では、ゲーブリエルとは別な行先地へ着いたエヴアンヂェリーンが慰めるすべもなく只困苦と悲哀を懐いて恋しき夫を尋ねて果てしない曠野を彷徨する光景が、いぢらしいまでに美しく描かれ、それが結局二人の絶えて久しい不思議な邂逅とその最期へとに導かれて、全篇の Climax に達してゐる。

Thus did the long sad years glide on, and
in seasons and places
Divers and distant far was seen the wandering
maiden;—
Now in the Tents of Grace of the meek Moravian
Missions,
Now in the noisy camps and the battle-fields
of the army,
Now in secluded hamlets, in towns and
populous cities.
Like a phantom she came, and passed

away unremembered.
Fair was she and young, when in hope began the long journey;
Faded was she and old when in disappointment it ended.
Each succeeding year stole something away from her beauty,
Leaving behind it, broader and deeper, the gloom and the shadow.

かくて長く悲しき歳月は流れ行き、
春夏秋冬いづれの時も、
東西南北いづれの処も、
さすらひの乙女は身を浮草に託してさまよい続けた。
或る時は優しいモラヴィア人の修道院に、
又或る時は戦場の騒がしき野営の中に、
又或る時は賑かな都会の巷に、
又或る時は静な片田舎の村々に、
幻の如く人知れず現れては、
誰に顔見知らるゝこともなく立ち去つた。
希望を懐いて長き旅路を始めた時は、
尚ほうら若く容貌よき乙女であつたが、
そが失望に終る今となつては、
早くも老い衰へてゐた。

一歳ごとにその美しき顔からは何物かが奪ひ去られ、
その痕には悲しみの影のみを広く深く残してゐた。

彼女のさすらひの辛苦とその貞節の程は、「立つる操を破らじと、屋鋪を抜けて数々の、憂き目をしのび都路へ、登つて聞けば其人は、東の旅と聞く悲しさ。いつかは廻りあふ坂の、関路を跡に近江路や、みのをはりさへ定めなく、恋し〳〵に目を泣き潰し」と彼の浄瑠璃生写朝顔話にある貞女深雪が短い契りのほいない別れ、海山こえて憂き苦労を重ねて駒沢次郎左衛門を探し求むる夫思ひの真心さながらである。かくして多年再会の機もなく、いつしか彼女は頭に霜を戴く身となつたので、最早これまでと観念してペンシルヴェニア（Pennsylvania）州フィラデルフィア（Philadelphia）市の婦人慈善会員となり、貧しきもの病めるものへの奉仕に身を捧げること数年、偶ま或る安息日のこと——

Suddenly, as if arrested by fear or a feeling of wonder,
Still she stood, with her colourless lips apart, while a shudder
Ran through her frame, and, forgotton, the flowerets dropped from her fingers,
And from her eyes and cheeks the light and bloom of the morning.
Then there escaped from her lips a cry of such

terrible anguish,
That the dying heard it, and started up from
their pillows.
On the pallet bofore her was stretched the
form of an old man.

Heard he that cry of pain, and through the
hush that succeeded
Whispered a gentle voice, in accents tender
and saint-like,
"Gabriel! O my beloved!" and died away
into silence.

俄然恐怖か驚愕かに襲はれたかのやうに、
色失せし唇を開いたまゝぢつと立ちとまり、
体ぢうがぶる〳〵と震へた。
彼の女は、思はず、その手から花束を落し、
その眼と頬は夜明の空のやうに紅色に輝いた。
やがて彼女の唇から恐ろしい苦悶の叫が漏れたので、
瀕死の患者達も、その声きいて枕を蹴つて飛び立つた。
彼女の前のしとねには一人の老人が病める体を横たへてゐた
彼もその苦痛の叫びを聞きつけたが、それに続く静けさの中
から、
一人のやさしい声が優しい聖者らしい調子で、

「ゲーブリエル！あゝ我が愛人よ！」と囁いたまゝ沈黙に消
え去つた。

Then he held, in a dream, once more the home
of his childhood;
Green Acadian meadows, with sylvan
rivers among them,
Village, and mountain, and woodlands; and,
walking under their shadow,
As in the days of her youth, Evangeline rose
in his vision.
Tears came into his eyes; and as slowly he lifted his
eyelids,
Vanished the vision away, but Evangeline
knelt by his bedside.
Vainly he strove to whisper her name, for
the accents unuttered
Died on his lips, and their motion revealed
what his tongue would have spoken.
Vainly he strove to rise; and Evangeline,
kneeling beside him,
Kissed his dying lips, and laid his head
on her bosom.
Sweet was the light of his eyes; but it suddenly

sank into darkness,
As when a lamp is blown out by a gust of
wind at a casement.

次いで彼は夢見るごとく今一度、幼き日の故里を見た。
緑のアケーディアの牧場、銀色に流るゝ清らかな川、
村と山と森の木蔭をさまよふ乙女、
若き日のエヴアンヂェリーンの姿が幻に立ち現はれた。
涙が彼の眼に浮んだ。彼が徐ろに眼瞼をあげると、
幻は消え去つたが、エヴアンヂェリーンは彼のしとねの傍に
跪いてゐた。
彼は彼女の名を今一度呼ばうとしたが、その甲斐もなく、
言葉は口より出でず、わづかに唇の動きで舌の言はんとする
を示すばかり。
立ち上らうとしたけれど、それも今はむなしいことであつ
た。
エヴアンヂェリーンはその傍に跪づきつゝ、
次第に冷ゆく彼の唇に接吻しその頭をわが胸に抱へた。
彼の瞳の光は美しかつた、が忽ち永久の闇に沈んだ、
恰かも窓から来る一陣の風に燈火の吹き消さるゝが如く。

All was ended now, —the hope, and the fear, and
the sorrow,
All the aching of heart, the restless,unsatisfied
longing,
All the dull, deep pain, and constant anguish of
patience!
And, as she pressed once more the lifeless head
to her bosom,
Meekly she bowed her own, and murmured,
"Father, I thank thee!"

万事はこゝに終つた。望も、恐も、悲も、一切の胸の痛みも、
止むことなき満たされぬ憧れも、一切の深き鈍き苦しみも、
絶えざる堪忍の苦悶も消え去つた。
かくて彼女はもう一度恋人の冷たい頭を胸に抱きしめなが
ら、
自分も優しくその頭を垂れて「天の父よ、あゝ有難い！」
と祈つた。
彼女は余りの精神的衝激と感動の為めに自分もその場に倒れ伏
し、神に感謝の辞を囁いだまゝ敢へなく息が絶えたのである。以
上で本文は終つてゐる。

四

次の二節は最初の序歌（prelude）に照応する収結辞（epi-
logue）となつてゐる。

Still stands the forest primeval; but far away

from its shadow,
Side by side, in their nameless graves, the
lovers are sleeping.
Under the humble walls of the little Catholic
churchyard,
In the heart of the city, they lie, unknown and
unnoticed.
Daily the tides of life go ebbing and flowing
beside them,
Thousands of throbbing hearts, where theirs are
at rest and for ever,
Thousands of aching brains, where theirs
no longer are busy,
Thousands of toiling hands,where theirs
have ceased from their labours,
Thousands of weary feet, where theirs have
completed their journey!

今も猶存す千古の原始林。
さあれその蔭より遠く離れて、
二人の恋人は居並んで眠つてゐる。
市の真中加持力宗の小墓地のさゝやかなる垣の下に、
二人は人に知られず、顧みられず横はつてゐる。
唯人の世の潮のみ日毎に二人の側に満干する。
二人の胸の永久に安んずるところ、胸を轟かすもの幾千人。
二人の頭脳もはやいそがしからぬところ、頭脳を痛むるもの
幾千人。
二人の手、世の生業から永久に休むところ、手を労するもの
幾千人。
二人の足、今は旅路を終へたるところ、足を疲らすもの幾千
人。

作者はエヴアンヂェリーンを書くに当つて、二人の最後の場をフィラデルフィア市内のペンシルヴェニア病院（the Pennsylvania Hospital）に置き、両人がこゝで邂逅しこゝで死んだことにしてゐる。尚この病院から程遠からぬ加持力宗寺院の墓地に二人が共に埋葬されたことにしたのである。それから以下の数行は、人間が往生によつて浮世の苦患から救はれて安楽世界に入り得ること、即ち、人間が一度幽明境を異にすれば、逝ける者は極楽浄土に安眠して人間苦の何たるを知らざるにひきかへ、浮世の有象無象は営々として塵芥の中に奔走し、世に在る限り息ある限り齷齪として日々の営みに憂き身をやつさねばならないと言ふ両者の苦楽の懸隔の如何に甚だしきかを言ひあらはした作者の述懐である。

Still stande the forest primeval; but under the
shade of its branches

Dwells another race, with other customs and
language.
Only along the shore of the mournful and misty
Atlantic
Linger a few Acadian peasants, whose fathers
from exile
Wandered back to their native land to die
in its bosom.
In the fisherman's cot the wheel and the
loom are still busy;
Maidens still wear their Norman caps
and their kirtles of homespun,
And by the evening fire repeat Evangeline's story,
While from its rocky caverns the deep-voiced,
neighbouring ocean
Speaks, and in accents disconsolate answers
the wail of the forest.

今も猶存す千古の原始林。
さはれその樹蔭には風習と言葉を異にせる民族の住みて、
唯悲しげなる霧の漂ふ大西洋の岸に沿うて、
アケーディアの農夫僅かに住まふのみ——
古里に骨埋むべく異郷よりさまよい帰りし祖先の末裔が。
漁夫の小屋には今も尙絲車と織機忙しく動き、
乙女等は今猶ノルマン帽と手織の外衣を纏ひ、
夕べの炉辺にエヴアンヂェリーンの恋物語を繰返す時、
程近き大洋の濤声は洞の巖に高鳴りて、
森の悲しき調べに淋しげに応ふ。

人の世の有為転変が作者の感慨を唆つてゐるのが察せられる。この物語の主人公なる二人の恋人は、既に去つて跡なく、今は唯僅かばかりの子孫等が古き物語として二人の悲恋を語るのみである。而も大洋の濤声、森林の松籟は、依然として永なへに変らぬのである。

五

エマースン（Ralph Waldo Emerson 1803～82）ホイットマン（Walt Whitman 1819～92）と並んでアメリカの三大詩人と呼ばるゝロングフェロウは、その人格は高潔であり、その詩は健全なる常識と教訓性に充ち平淡にして流麗なる詩句と、清純にして滋味豊かな詩美は、愛誦する人の心を魅する魔力とならずには措かない。

人類の悲劇に深く哀憐の情を禁じ得ざる彼は、哀切極りなきアケーディアのこの悲劇に痛く心を動かされ、様々の歴史的材料を蒐集研究した末、この物語詩に於て初めて材を自国に取つて、従来アメリカで見られなかつた唯一の長篇叙事詩を発表するに至つたのである。この美しい詩には、アケーディアの純朴な農民の幸多かりし平和な家庭生活、追放の騒擾、森林に富める北部の村落

地味肥沃なる南部の村落、恋人同志の結婚の日の喜悦、さては、施療院の病床に変り果てた姿の老の男女が命数も尽き、その魂が天国で永遠に結ばれる事など、巧みに対照せられて、平易淡々たる筆致の中に不思議にたゞよふ艶麗な匂ひをおびて悲劇の活画が描き出されてゐる。殊にエヴアンヂェリーンが、哀れにも恋しき夫を尋ねての漂浪の旅に憂身をやつした光景が美しく描き出されてゐる。彼女が忍びがたきを忍び堪へがたきに堪へて己が愛を完うした神の如く尊い心と、最後まで渝らぬ貞操の美と凛々たるその力には、哀憐の情に胸せまるものがある。エヴアンヂェリーンのこの純潔で崇高な聖愛は、ロングフェロウの筆致にして始めてよく描き得るものであらう。

現代の女性の中には、或はエヴアンヂェリーンの如き女性は、夢のやうな架空の女性としか考へられないと言ふものがあるかもしれぬ。しかし、女性の理想と美徳は、遺憾なきまでに彼女の上に描き出されて読む者の涙をそゝる。さればこそ彼女の美徳を讃へるためにその故郷には記念の公園が設けられ、彼女が恋人と屢々出逢つて偕老同穴の未来を契つたと伝へられる柳の木蔭には、彼女の銅像さへ建てられ彼女の美徳を永久に伝へてゐるほどである。

テニスンの「イーノク・アーデン」を読んで深い同情と哀感を禁じ得なかつたものは、それに似た世にも痛ましいこの恋の哀史を、必ずや愛誦することであらう。又この美しい牧歌的哀史は将来永く滋味豊かな家庭文学の読物として永久に世人に愛誦せられるであらう。